

# 栗田部 史跡ガイド

# お お と べ 男大迹部の里



岡太神社本殿

花筐自治振興会

人づくり・ふるさと文化部



平成 19 年 9 月

花 筐 自 治 振 興 会  
人づくり・ふるさと文化部 部長 佐々木昇

発刊にあたって

私が所属している花筐自治振興会は平成 18 年 4 月に発足し、現在 2 年目を迎えています。設立にあたり自分たちの町はどこが長所で、なにが短所なのかを話し合い振興会の専門部会の立ち上げに反映しました。長所として古い歴史と数々の史跡は特に大事にしたい意見が多く、その長所を伸ばす「人」を育てることを「人づくり・ふるさと文化部」の目的に致しました。

折しも今年は継体天皇即位 1500 年の節目の年で、郷土の歴史にも関心が寄せられる好機に粟田部の歴史や史跡をやさしく解説したガイドブックを作成し、郷土の歴史を広く知ってもらいたいと思っていました。そんな時に「あわたべ抄史 男大迹部の里」という郷土誌に出会いました。この冊子は粟田部壮年会が花筐公民館と花筐公園保勝会の協力を得て、昭和 59 年に発行されたものです。冊子の内容としては分かり易く平易な文章でまとめてあり申し分ないものでしたが、発刊して 20 年以上過ぎているので蓬萊祀などは現況を加筆する必要が生じ、また写真も更新して「平成版」に改定すべく再編集を行いました。当然ながら紙に印刷したアナログ情報からパソコンに再入力したデジタル情報に置き換えて、情報としての活用範囲を広げることも目的の一つに掲げました。

単なる再編集でも不慣れな作業も多く、間違いを見落とした所や史跡・伝統行事についての説明不足を感じながらも、なによりも平成 19 年の時点でのガイドブックをまとめることが重要と考えて進めました。どうか本誌を片手に実際に史跡を見て回って、郷土の歴史について関心をもっていただければ幸いです。更には振興会活動と一緒に参加し、共に汗を流していただきたいと願っています。

未筆ながら、ご指導および多大なご協力を頂いた部員各位、特に宮田尚一部員には心よりお礼申し上げます。また公民館吉田三和主事ならびに原本の再編集を快諾いただいた善玖寺正弥住職にもお礼申し上げます。

## 目 次

### 地 名

栗田部の地名の由来と沿革 .....	1
花筐公園の由来 .....	3

### 遺 跡

薄 墨 桜 .....	4
皇子ヶ池 .....	5
名勝花筐公園碑 .....	5
花筐ゆかりの地碑 .....	6
栗田部城跡 .....	6
右大臣蘇我倉山田石川麻呂廟 .....	7
岩 清 水 .....	8
帝々の石 .....	8
皇子の森 .....	9
佐山媛の古跡 .....	9
佐山寺菩提所跡 .....	9

### 墓 碑

錦 塚 .....	1 0
斉藤梁山寿碑 .....	1 0
恵迪斉跡碑 .....	1 1
恵迪斉林詮碑 .....	1 1
坪田孫助翁碑 .....	1 2
時 雨 塚 .....	1 3
村 雨 塚 .....	1 3
雨聲の句碑 .....	1 4

中山翁寿碑 .....	1 4
飯田友軒墓 .....	1 4
忠魂碑 .....	1 5
千部法華塔 .....	1 5
神事と伝説	
迹王の餅 .....	1 6
菜祀（おらいし） .....	1 7
市 祭 り .....	1 9
徳日参り .....	1 9
左義長祭 .....	2 0
琴 弾 山 .....	2 1
竹根化蟬の碑 .....	2 1
神 社	
岡太神社 .....	2 2
天 神 祠 .....	2 3
金刀比羅神社 .....	2 3
秋 葉 宮 .....	2 4
出雲大社 .....	2 4
観 音 堂 .....	2 4
八 幡 社 .....	2 4
西山地蔵堂 .....	2 5
地蔵町の地蔵 .....	2 5
荒櫓神社 .....	2 5
麻気神社 .....	2 5
はながたみの里 名勝・旧跡（イラスト） .....	2 6

## 粟田部の地名の由来と沿革

粟田部の地名の由来には諸説あり、継体天皇の即位前の御名を男大迹皇子の頃の宮居の里として『男大迹部の里』呼ばれ味真野郷アジマノゴウの一部であった。

ところが、養老二（718）年、泰澄大師がこの地に訪ずれた折、この地を男大迹部の里と呼ぶのは皇子名を呼びすてにするようで誠に畏れ多いと云うので、現地名の粟田部に改称したといわれている。一方、越前国司解によれば当時の有力氏族の粟田臣アフラオミ一族がこの地方に住んでいて、粟田臣にあやかって現地名としたという説。他説では、味真郷は朝廷に米、粟を納める田部屯倉タベミヤケが設けられておりそこに働くものを田部と称したので、それに因み現地名粟田部としたとの説がある。

ここは何れにしても古い伝統をもったところで、然も継体天皇即位前 58 歳までの長期間在郷されていたというので、幾多の「神事」、「伝説」、「史跡」が伝えられている。

中でも「謡曲の花筐」。「皇子形見の薄墨桜」。「皇子自彫の神像」。「皇子ケ池」。往古より伝承の「迹王餅」、「蓬萊祀」等の神事。皇子に関係する史跡として「鹿の浦」「佐山」「馬場」「皇谷」「玉の尾」等その他数多くの伝説神事、史跡が伝えられている。

味真野郷は大和朝廷との関係が深く、流罪の中で最も軽い近流地コンルチになっていた。味真野地区には流罪となった中臣宅守ナカトミノヤカモリが恋人との別離を詠った相聞歌が残っており、粟田部には大化の改新後に右大臣となった「蘇我倉山田石川麻呂」の末子の清彦が冤罪で流罪となっている。

また、この地は往古より物資往来の地として定例の市が月の 2 日と 7 日に開かれていて、その名残の二日市の地名が今でも残っている。

藩政時代に入っては、福井藩内でも枢主的な地域として発展し、藩札両替分所が置かれた。また藩の財政的危急を救った当地の蚊帳の製織、羽二重の外国輸出の先覚者を輩出するなど商業・工業の面でも先進地であった。

廃藩置県に当っては今立郡の役所も設けられる等、今立郡 2 町 16 ケ村の中心地として南越地方で重要な役割を果たした。また福井藩の村塾が設けられ、後の花筐小学校が県下の教育面でも草分け的な存在であった。

また、村往古の草分け時代の戸数を調べると僅かに 12 戸余りだったと云うが、元文 5 ( 1740 ) 年には 333 戸、安政 6 ( 1859 ) 年には 567 戸、明治 28 年には 651 戸と増加していった。大正 15 年に町制が施行され粟田部町となり、四区 ( 栄、蓬萊、旭、富永 ) に分けたが、行政上は一町一区制で、番地を 106 号まで定めた。

昭和 29 年には北新庄村西櫛尾を編入し、昭和 30 年 3 月に南中山村、服間村、北中山村の一部を粟田部町に編入合併し、更に昭和 31 年 10 月 岡本村をも合併したことにより粟田部町を改めて今立町とした。その後平成 17 年 10 月 1 日に今立町と武生市が合併して越前市粟田部町となり今日に至っている。しかし、行政上の名称が変わっても「馬場」「御殿町」「耒耜町」などの地籍名・字名の中に粟田部の歴史を辿る事ができる。

粟田部は在郷町として往古より文化面、商業の中心地であったが、屋敷町ゆえに防災の機能が乏しく、寛政 8 ( 1796 ) 年以来同 12 年、天保 5 年、明治 2 年明治 6 年、昭和 2 ( 1927 ) 年 4 月 21 日の 132 年の間に 6 回の大火にあい、特に明治 6 年の大火では 407 戸 803 棟を焼失し、又昭和 2 年の大火でも 200 棟を超える災禍で古来よりの古文書、宝物の多くが焼失しており、今となって思えば古い村だと云われながら裏付けとなる証拠品が少なく、男大迹皇子の伝説神事、史跡の真偽が問われていることは何と云っても悲しいことである。

また、たまたま貴重な資料があっても忘れ去れていることや、外部へ持出されて既に始末されていることも予想される。

残された課題としては、古墳等の発掘や広範囲の史料の研究により何らかの手がかりが得られることが唯一の望みである。

## 花筐公園の由来



弘化元年に粟田部の関甚兵衛が、大和国吉野より数十本の桜を現在地に移植し桜ヶ丘と呼んだのが花筐公園の始まりといわれている。

" なにをかは 春のながめといわれいむ 桜ヶ丘の花の曙 „ どうたわれ、  
また明治 5 年 10 月東京芝名山閣出版社発行瓜生三寅著「日本国尽」に  
" さて名所には 夕月夜露のやどれる安治真野や 桜の粟田部こそは  
継体の帝のいまだ御位に即かせ給わぬその以前 宮居のありし名所なり、  
と詠われた。明治 28 年 7 月 30 日の台風は県下全域に未曾有の惨害をもたらし、  
死者 163 名建物流出 350 戸全壊 230 戸埋没 110 戸合計 690 戸という惨状となり、  
粟田部でも岡太神社本殿背後が山崩れになった。その後整地の上桜を植えて現在  
の上段が完成し、初期の花筐公園の姿となり、その後いく度かの改良工事を経て、  
昭和初期には県下屈指の桜の名所となった。

花見時には連日 1000 名以上の花見客で賑ったが、戦争中桜は伐り倒されて食糧生産のため畑と変り、あたら県下屈指の桜の名所は無残な姿になってしまった。終戦後復員して来た青年たちが花筐公園を元の姿にという熱意ある奉仕作業で復旧の努力が実り公園の体裁が整って、昭和 37 年には都市公園整備計画の指定を受け、第 1 次 5 ヶ年整備計画・昭和 49 年には第 2 次 5 ヶ年整備計画事業により、風致公園としての指定をうける。現在は花筐公園を愛する日を設け、公園の奉仕作業に沢山の住民が参加している。また平成 19 年には国の登録記念物の指定を受け花筐公園保勝会と地域住民にとってこの上ない朗報となった。

## 薄 墨 桜

三里山山頂皇谷の地に、樹の周り 4.5 m 余幹の高さ 9 m 余、樹令 500 ~ 600 年を有し、昭和 45 年 3 月天然記念物として福井県の指定を受けた薄墨桜の樹があるが、伝えによると男大迹皇子は日頃から大変桜を寵愛されていたが、即位のため急に都へ上られることになり、神社に形見として遺していかれた桜を世人はなぐみ花と呼んだと伝えている。後俗風に染まるのを畏れて人跡まれな現在地に文亀 2 (1503) 年右野盛重 (近郷切つての大富豪 大島三郎右衛門の先祖) によって植えかえられ、皇子の遺跡として崇めるようになった。この桜は皇子在郷のときには紅色で匂が四方に充満したというが、皇子が都へ上られて後は花に対する愛玩が薄れ、次第に色がうす黒くなって、いつ頃からか薄墨桜と呼ぶようになったといわれている。現在の薄墨桜はおおよそ 500 年前に植え替えられてから何代



目なのかは不明だが、老木化が進んでいて特に近年の大雪や豪雨により傷みが進んでいる。いずれしても粟田部を象徴する史跡であることには間違いなく、花筐公園保勝会の力を借りながら、定期的な手入れを継続しなければならぬと思われる。

岡太神社古縁起によると、薄墨桜の傍らに祠があり花筐神社と呼ばれていたが、もとの八幡社である。後に今の八幡町に八幡社を移したと言われている。上記の大島家の古伝説でも氏神の八幡宮を建谷の祠に遷座したと伝えられているので、史実と思われる。

## 皇子ケ池



この池の水は、第 27 代安閑天皇・第 28 代宣化天皇御二方の産湯ウツユに使用したとされている。

享保の頃の越前八郡古城跡屋敷跡記録によると「村ヨリ良（ウシトラ）佐山ト言ウ所皇子ケ池ト言フ所アリ 広サ一丈二六尺則之男大迹皇子（第 26 代継体天皇）御所池跡ト言ヒ伝ヘアリ」と記されており、もともと日常御膳水用として

使用されていた池の水であったことがうかがいしれる。

現在の六角形石の玉垣は、天保元年継体天皇 1300 年祭を記念して、木津成助氏が私財を投じて造営したものである。

## 名勝花筐公園碑

古い歴史を秘めた花筐公園の入口に建てられたこの碑は粟田部と縁の深い 16 代福井藩藩主松平春岳公の直孫に当る松平永芳氏（靖国神社宮司）の筆によるもので、またこの碑石は福井城の石垣の石で、関文治氏の寄贈を受け、昭和 41 年 4 月に花筐公園保勝会が建立したものである。



## 花筐（ハナガタミ）ゆかりの地碑



「花<sup>ハナ</sup>筐<sup>ガタミ</sup>」は粟田部の歴史の象徴であり粟田部の代名詞でもある。

能楽の祖 観阿弥の子世阿弥作の謡曲「花筐」は天才的能楽芸術家世阿弥の名と共にあまりにも有名であるが、この「花筐」ゆかりの地を後世に伝えるため、宝生流第 17 世宝生九郎氏の筆によるものである。

碑は昭和三十年五月三十日有志によって建立された。

なお碑の台石は、御大典記念の大砲が戦時中供出されて台のみが残っていたのを再利用したものである。

## 粟田部城跡

粟田部城(行司ヶ嶽城ともいう)は三里山の三角点から約 50 mの東南にあるが、ここには今なお敵の攻撃を防ぐための長い堀切りと多数の城の一部が構築されていた形跡がある。

元龜 4 ( 7 月天正と改元 ) 年 3 月頃から織田信長は、朝倉の勢力下にある若狭江州を攻め出したので、朝倉義景はその防御に疲れ 8 月 20 日滅亡したが、粟田部城主朝倉出雲守景盛も江州刀根坂にて戦死したといわれている。粟田部城はその後ほどなく壊わされたということである。

## 右大臣蘇我倉山田石川麻呂の廟

大化の改新は蘇我入鹿の独裁政治を断ち切る事件であったとされる。日本書紀



によると功労者の蘇我倉山田石川麻呂は改新後にできた大臣制で右大臣となったが、日向身刺の企みで中大兄皇子から謀反の罪で兵を向けられた。石川麻呂は天皇軍と争うこと無く山田寺で自害し、妻子もことごとく殉死したとあるが、末子の清彦(赤狛)は幼少のため乳母の嘆願で越前国の粟田部にただ一人流罪となり、その後清彦は粟田部に住みつき歌鳳山(八幡山)に父石川麻呂の廟を建立して祀った。第53代の重貞は祖先の冤罪を晴らす為に奈良の山田寺に碑を建て、現在の右大臣廟を

建立している。廟のある境内は先祖代々の墓碑が並び山田家隆盛の頃は実に1万平方メートルの広大な境内だったといわれ、天保11年には福井藩から家柄が古いため苗字帯刀袴着用の御墨付きをもらい当時20石4人扶持を賜わっていたといわれている。山田一族は粟田部が発祥の地であるが、一時期鯖江市河和田地区椿坂に住んでいた記録も残り、近年は山田清兵衛と名乗り薬商を家業とし清彦より60代続いているが、現在その山田家も消滅寸前で、粟田部の歴史を彩る名花が散るようで残念である。

(註)代々山田家に保管された石川麻呂の木彫りの像は、現在越前市役所に保管されている。



## 岩 清 水

切りたった岩壁のあちこちに石の仏像が彫りこまれた岩清水と呼ぶ霊地がある。



昔、泰澄大師がこの辺で修業したという。

岩のくぼみから清水が湧き、杉の木立からは涼風がそよぎ、昔の大師の修行が感じられる霊地である。

この石仏は粟生寺の西国礼所の観音堂のものをこの岩壁へ移したという。

## 帝々の石

男大迹皇子の近臣に、皇子の幼少時より侍者として仕えて来た帝々左衛門、帝々右衛門の両名がいた。後廷々と名を改めた。この両名は佐山の地に住んでいたが、王がこの地を離れたのは水間谷に移り住み、岡太神社の祭礼には皇子より賜った宝刀を拝持し参拝して来たといわれる。子孫の廷々の姓は今でも残っている。



廷々の石は、左衛門の庭の石で現在は岡太神社の神輿殿の前に移したものである。

廷々家は岡太神社の巫女の子孫の説もある（柳田国男説）

## 皇子の森

皇子の森は皇谷山の麓字玉の尾に在り、安閑・宣化両天皇の御降誕の地ということが、味真野名蹟誌に「今に粟田部大溪山の麓に皇子の池皇子の森と云うありて正しき皇居は此処なりと云えり（越前名蹟考）」とある。

## 佐山媛の古跡

佐山の地に「鹿の浦」と呼ぶ男大迹皇子の御遊覧の所があった。  
味真野名蹟誌に、佐山御前といえる妃のおわせし跡として今に佐山と呼ぶと見え、又帰雁記に粟田部の佐山と云う所に御所跡と云って粟田部丑(北東の方)の方畑の内東西七拾間南北貳拾間計所云々と記載せり(越前名蹟考)とある。

## 佐山寺菩提所跡

越前名蹟考に、又粟田部の佐山と云所に御所跡有、佐山寺というは御寵女なりし佐山姫の菩提所なりしといへり(帰雁記)とある。〔現在の善玖寺〕

## 墓碑

### 錦塚

松尾芭蕉門下各務支考<sup>カガミシコウ</sup>の流れをくむ美濃派に属する安田以哉坊<sup>ヤスダイカボウ</sup>が、この男大迹皇子の宮跡を訪ね



句はしや

昔にしきの 山といひ

と往古を懐古して吟じたが、俳譜の獅子門初代の瑾理庵白起(白起は佑の孫で、医師だが俳道に志した人で福井藩飯田上俳人以乙斎に師事し後美濃派以哉坊に師事す)は以哉坊の高教を永久に伝えるため寛政3(1789)年6月琴弾山の西麓の西国三十三ヶ所観音石像の辺りにこの碑を建てたが、たまたま地震があったので粟生寺境内にこの碑を移したという。

### 斉藤梁山寿碑

医師斉藤良衛を父として天保4年に生れ、恵迪斎創立当初よりの塾生で三寺三作塾長が松平春岳公の命で帰藩するに当り、塾長代行を托されたが塾生の信望も篤く、また教育に対する情熱は父祖伝来の医業までも捨て郷土の子弟教育に一生を捧げた熱血あふれる教育者であった。その門弟は700名に及んだという。この寿碑は門弟有志が師の還暦を寿ぎ、西山の南麓に明治30



年5月11日建立したものを後現在地へ移転したものである。62歳で没す。

## 恵迪齋跡碑



嘉永3年郡奉行大井弥十郎は、粟田部の地が福井藩領内で産業経済文化の香り高い所であり教育文化施設の必要性を痛感して、藩主松平春岳公に献策し、藩公認村塾として恵迪齋を嘉永6(1853)年6月設立し、塾長に福井藩士三寺三作を迎え塾名を「四書」の中の「<sup>ミチ</sup>二<sup>シタガ</sup>恵<sup>キチ</sup>へ八吉」「<sup>ミチ</sup>二<sup>サカ</sup>逆ラへ八凶」という字句を引用して「<sup>クイラキサイ</sup>恵迪齋」と命名した。その後安政3年3月藩学問所明道館外塾4ヶ所と共に恵迪齋を藩直営として授業料謝礼等を廃した福井藩学問所以外の藩唯一の藩立平民学校として存在したことは他に例をみないだけに誇るべき教育施設であり、特に明道館の学監は橋本左内先生であり、恵迪齋の価値評価は相当高かったことは言うまでもない。また、この恵迪齋跡碑の揮毫は、この地が郷土文教発祥の地でもあり現在の花筐校名の名付け親でもある福井藩主松平春岳公の後裔19代松平康昌侯の筆によるものである。

## 恵迪齋林詮碑

福井藩士結城(林)詮は恵迪齋初代塾長三寺三作が、安政4年福井藩学明道館教授として帰藩した後慶応元年二代塾長として名門恵迪齋の経営に努力し、明治3年藩命により恵迪齋が廃止され、その後郷学所長を勤め窮理、桜鳴、愛景、花筐の各小学校教員として初代校長を勤め、明治19年まで粟田部の小学校教育につくした功績を顕彰して有士が明治36年8月この碑を建立したものである。



## 坪田孫助翁碑

坪田孫助翁は天保7（1836）年の生れで幼名を駒吉のち松吉と称し、家を興すに至り孫助と名乗った。生来機敏で商才があり、その先見性は海外通商貿易の必要なことを痛感し、横浜へ飛び福井羽二重の国外輸出に努力した。

越前福井藩の藩財政再建の責任者由利公正は坪田翁の識見を高く評価して、藩保有の生糸全部の処分を翁に一任した。その結果期待通りの大成功をおさめ、莫大な巨利を博したので福井藩はこれに対して金500両(当時米1石が1両の時代であったので現在の時価に換算しても相当な巨額であることか判る)を以って報い福井藩が坪田翁に如何に大きな期待と評価をしていたかが窺える。

翁はまた、福井羽二重の声価を世界中に広めた大功労者であり、海外通商貿易の日本人最初の先覚者として郷土の誇るべき偉大な傑物であったことを讃えてこの碑が建てられたものである。特に北海道五陵郭で官軍に最後の抵抗を挑んだ幕臣の農商務大臣榎本武揚の顕額が一段と光彩を放っている。



## 時 雨 塚



獅子門下俳譜第五代中戀<sup>ランチユツ</sup>庵寿仙の  
辞世の句碑に

時雨る、や

空は浮世の 人ころ

がある。

(註) 寿仙とは、法幸治良左衛門  
のことで明治 30 年  
10 月 28 日 79 歳にて没す。

## 村 雨 塚

獅子門道第六世宗匠羅浮園龜昔島伴平氏の句  
碑で長男島連太郎氏が建立した。

むらさめに

いよいよ秋の

深きかな

の辞世の句碑と共に等身大の伴平氏銅像も同時  
に建てられたが、戦時中軍へ供出された。

なお、碑の裏面の文は郷土の文学者 石橋重吉  
氏の撰である。



## 雨聲の句碑

獅子門下俳譜第四代の雨聲は、酒井兵右衛門のことで（家号灰屋の生れ）碑文に、この里に伝える第五世の文台を次のように書遺している。

今度 秀北主雅に 授与す  
開く 扇道の要を 忘れなよ

トケンテイウセイ  
杜鵑亭雨聲

明治 15 年 10 月 7 日 65 歳で没す

## 中山翁寿碑

中山翁は重野謙造と称し、重野家初代の漢方医、翁は常に医は仁術なり の比喩の如く、自らの生活は質素を旨とし医術の研さんに励み、その医学の究明におこたることなく患者の医療に当っては誠を尽すと共に貧者といえども決して軽ろんずることなく、極力医療に努める傍ら稀にみる好学の人で、その医・儒の門弟実に百余名に及んだという。

翁の人徳遂に藩の知るところとなり褒賜せられ銀十五匁を授けられたが、嘉永 6 年 3 月それを記念して門下生寿碑を建立した。

題表は<sup>ヌキナシゲル</sup>貫名苞の筆、碑陰は鯖江藩の文学者 喜多山三郷、撰書は同藩の大山陶斎となっている。

## 飯田友軒墓

友軒は、田中適所門第一の高足で藩末から明治に及ぶ郷土周辺の医儒の輩出は友軒に負うところ大で、医術文学に優れ、門弟計って西山墓地に嘉永 5 年 3 月墓碑を建立した。

## 忠 魂 碑

大正 13 年 10 月村議会満場一致で村費 3,988 円を以って建設を決議し、1 年半余の年月を経て巨大な岩石の山腹に碑柱を建てた。他に類のない雄大な碑であり碑文は当時日本軍の元帥東郷平八郎の書によるもの。碑柱下に鎌倉時代(1294 年)の名刀匠五郎正宗と双壁と言われた相模広光作の古銘刀(木津群平氏所蔵)が納められている。

またこの忠魂碑建設のため 2 名の尊い犠牲者を出すほど困難な工事であった。



## 千部法華塔



福井藩主香華院東光寺十世東岳和尚が、妙法蓮華經 3,000 部、金剛般若經 10,000 卷、弥陀經 1,000 卷を書写した供養塔である。

山ノ寺泉福寺境内

寛政 6 (1786) 年 8 月 6 日建立

## 迹 王 の 餅



10月13日の秋祭りに継体天皇が大和国盤余玉穗宮イワレタマホノミヤに遷都された日を祝して迹王の餅を供する神事が今も連綿と受け継がれている。

この神事は、宵宮の10月12日早朝よりその年の当番に選ばれた若者堂宮各12名の家より大半桶ダイハンギに用意された餅を積んで、威勢の良い迹王の餅の唄声と共に街中を練り歩き、神前に献上する神事である。

この由来は皇子がこの地に潜竜の頃、常に深く御心を民事に留め

られ、その恩徳に報いるため郷民が餅をついて奉納したところ、皇子からも餅をついて郷民に下賜された故事に由って1500年の今日まで絶えることなく続けられている。粟田部で生まれた男児は堂と宮の講に加入することが出来て、加入す

ると毎年10月13日早朝に餅が貰えるが、やがて20代後半になると当番として勤める。



## 萊 祀 (おらいし)

萊祀とは、通称は蓬萊祀と呼ばれ現在も続けられているが、旧正月 12 日に継体天皇が河内国樟葉宮に着御あらせられた日を吉日として、古来 12・13 の両日を祭日とし 13 日に萊祀と称して天皇の行幸に擬して神幸の儀を厳粛に行う式典であった。現在は祭日の 2 月 11 日に山車の曳き回しを行い、13 日に萊祀祭を執り行っている。下のポスターは江戸時代に栗田部の画家木津成助により描かれた絵図を元に、即位 1500 年記念して花筐自治振興会により製作されたものである。



当時は村人あげて山車物を終日街中曳きまわし、当日は親類縁者を各家々で招きそれに他の村からは遠近を問わず人々が大量集まり、街中は終日大賑わいしたと伝えられる。また、福井藩から警護人が派遣され往来の通行は厳しく取り締まられ、蓑笠着用は何人といえども禁じられていた格式の高い神事であった。

蓬萊祀は、天平勝宝年（749）頃に初められて、天正元年（1573）まで続けられて暫く中断し、天正17年頃から再興して明治5年まで続いた。

その当時より毎年当番宅を決めて、当番宅が経費を負担して行われていた。284年間の当番宅を記録した「ライシ宿帳」が現存している。

戦後間もない昭和27年に井筒新造翁が再開し数年は続けられたが、また中断し、昭和59年に当時の栗田部壮連協が中心となり再興された。その後は壮年会が続けて、平成になってからは敬成会と壮年会が力を合わせ今日現在まで運営された。

平成17年には「蓬萊祀保存会」が設立され、同年「国選択無形民族文化財」に指定された。

継体天皇即位1500年の節目の年にも厳かに執り行うことが出来たのも、先人たちはもちろんのこと、地域住民で結成された敬成会や壮年会の地道な努力の結実であろう。

栗塚勝治著の郷土史往来に蓬萊祀が詳しく述べられ、起源について別の考察もあるので、興味のある方は読んで下さい。



## 市 祭 り

この神事は正月9日（今は2月9日）深更（午前2時より7時）に行われる貨幣交換の神事で、氏子は神社に参詣して小判（餅米の粉を材料）を声高に10万両100万両と景気よく呼び声をかけながら買う風習で、小判購入の参詣者には中央に菊理媛、左右に恵比須・大黒様の両像の木版刷りのお札（フダ）が配られることになっている。

参詣人は神前に商売繁盛を祈念し、早速小判とお札を我が家の神棚に供え再び商売繁盛家内安全を祈る習慣になっている。

この神事は寛弘5（1008）年を初めとして今日まで約975年余り連綿として継承されている古式床しい神事であって、この市は往昔は毎月2と7の日、月6回開かれたといわれている。

現在の二日市は2日に市が開かれた名残りの町名でありまた7日には本町で市が開かれたと伝えられている。

このように毎月定例日に市が開かれたのは、越前国では敦賀、三国の港町は別として武生、織田、平泉寺と粟田部以外にはその例がなく、この粟田部は古くから産業商工の町として近隣の中核的存在であったということである。

## 徳 日 参 り

市祭りの翌正月10日（今は2月10日）は岡太神社の拝殿正面に仏像一躯が安置されるが、参詣者は深更（午前2時より7時）の時刻に神社に参詣して無病息災家内安全を祈る神事である。

伝えるところによると、この仏像一躯は養老2（718）年正月7日から12日まで泰澄大師がこの地に来錫してこの社に仏像二軀を勧請して神仏同躰の行を修めて、社を崇めて白山三社大権現神社と称した頃よりのものと推察される。また、大野郡篠倉村の篠座神社（延喜式神名帖二記載）より当社へ移した像とも伝えている。

徳日祭りの起源は不詳である。

## 左 義 長 祭

古来よりの神事の一つとして、毎年正月 14 日岡太神社拝殿前、本町上の辻、本町下の辻の三ヶ所で行っていたが、天保 10 ( 1840 ) 年より岡太神社拝殿前一ヶ所に併合し 1 月 15 日に行われるようになった。

戦後は厄年の男女が当番で、中心に杉柱を立て松・竹・わら等で裾を巻き土台を作り、正月に使用済の松飾りや門松や厄年の男女が火打ちを子供たちの書道の作品などで、15 m の柱に美しく飾り付けて、神官の大袂いの後代表の人が点火し、ドンド焼きをする。

寒中の火の神事で、人々たちは降り注ぐ火の粉を浴びながらも家内安



全、無病息災、開運など祈願する人たちで賑わう。ドンド焼きの最上部には鯖の尾といわれる縁起物があり、ドンド焼きが引き倒されると、争ってそれを奪い合う。なお鯖の尾は持ち帰り家内に飾れば、災い除けになると言われている。

## 琴 弾 山

岡太神社本殿裏を薄墨桜へ登る途中、松の緑を背影に国の整備事業を終えて、憩いの場に変貌した展望台のある小高い丘があるが、それが琴弾山である。

その昔、朝な夕なこの丘の館から孤独な姫の哀愁にみちた琴の調べが聞えて来た。村人達は素晴らしい恋人のあらわれるのを一日千秋の思いで待っていた。ところが突然気高い一人の皇子がその丘を登って行くのを見た。

その皇子は非常な笛の名人で、それ以来二人のすばらしい琴と笛の合奏の調べが毎日のように聞こえるようになった。

村の人々はこの恋人同志の喜びに、ほっと安堵の胸をなでおろした。それも束の間、春夏を過ぎた或る日、突然琴の弦が切れ、二人は別れることとなった。

それ以来その姫は山を降り出家したという。

主のない館は風雪に荒れ、遂に跡かたもなく消滅し、数百年を経過した今もお幻想的な調べが聞えてくるようである。

## 竹根化蟬の碑

橘南溪の見聞記である東遊記に、粟生寺の住持（真融上人）との交流があり、二十日余りも逗留したが、その折粟生寺境内の竹藪を掘ると竹の根がごとごとく蟬に変化して然も生気が備わって動揺して地上に出たもの、いまだ半ば竹で半蟬に変わりかかったもの等その数百千に及び、余りの珍しさに二つ三つ求めて携え帰った中に、背中より竹が生え出たものがあり。人に話したところ草の根が虫に変ること、竹が蟬に変ずることもあるという橘南溪の見聞記が江戸時代に全国に紹介されて、粟田部の地名が一躍有名になったという。竹根化蟬の物語を後世に永久に伝えるためこの碑が建てられた。

神 社

## 岡 太 神 社

当社は、延喜式神明帖（延長5年頃）に記する旧今立郡下十四座中最も古い社で、当初玉穂宮（タマホノミヤ）と称し、雄略天皇（479年）以前からあった古社である。養老2（718）年正月7日から12日まで僧の泰澄大師がこの地に巡錫の折、仏像二軀を勧請して神仏同体の行を修めて社を崇めて「白山三社大権現神社」と称したという。

祭神 タチツヌミノミコト 建角身命。 クニサツチノミコト 国狭槌尊。

オホナムチノミコト 大己貴命 アイドノ 相殿として継体天皇を祀っている。

春季例祭は4月12日、秋季例祭は10月13日。秋の例祭には子供神輿と大人神輿が街を練り歩き、町をあげて祝う。この日小学生は早く帰宅できるので一層楽しみにしている。



上は岡太神社本殿  
左は拝殿

## 天神社

当社の御神躰の勧請は雄略 18 年で、男大迹皇子が在郷の折自ら彫まれた天神七代の神の中の少彦名命の尊像で、朝夕皇子は天長地久に祈られたが、武烈天皇の突然の死去で樟葉の宮へ還御になられる際、皇子に仕えていた現善玖寺の先祖へ後々までも祀りを依頼していかれたものである。

(註)善玖寺はもと天神社の別当で、明治 6 年の大火までは皇子の遺品を数点所蔵していた(越前名蹟考)。

祭日は 9 月 4 日

## 金刀比羅神社

当社は長保 3 ( 1001 ) 年藤原実秋によって建立されたといわれている。  
当社は天保 5 年の馬場焼に全焼した際、御神体がお札になって空中に舞い上がり大滝の権現山の一番高い古い杉の枝にかかっているのを夢の告げで知らされて、それを発見して御堂を再興し、そのお札を奉納したという。平成 19 年には屋根瓦の修復を終えている

祭日は 8 月 9 日, 10 日に行われ こんぴらさんの祭りとして親しまれている。



## 秋 葉 宮

石象山東麓字佐山地に古来より木津群平家等講中の祀る宮がある。

(祭神 火産霊命, 崇神天皇)

祭日は 9月4日

## 出 雲 大 社

石象山西麓字佐山地に明治31年4月12日開始の社が、清水幸助氏の発起尽力で建立された。

祭日は 8月9日

## 観 音 堂

観音堂は観音町の地籍にあって、現に祀られている本尊は地蔵菩薩二躰と毘沙門天一躰で何れも平安末期の立像である。

この観音堂は当初は板屋源右衛門の所有だったものが、元禄16年当町善玖寺に寄贈されたが、のち本町浅沢幸夫氏(室屋)の所有になり、戦前までは毎年4月18日の祭日にはお鏡餅一重が善玖寺より寄贈されていたが、戦争中の食糧不足が原因でその習わしが廃絶し現在に至っている。

## 八 幡 社

祭神は応神天皇で、勧請年月日は不詳であるが、慶長14(1609)年の再建の記録が伝えられているので、かなり古い社と謂える。

祭礼は 8月15日

## 西山地蔵堂

本尊は延命地蔵で、建立の由来は戸谷のチエという女の情夫がこの地蔵堂近で刃障にあい、露と消えたのを哀れんで下谷町の権四郎、観音町の定次郎、本町の豆腐屋市兵衛等により受難所のこの堂のところに一字を建て、その菩提をとむらったものである。

祭日は 6月25日

## 地蔵町の地蔵

本尊は延命地蔵で、伝えによると別印村からここの堂へ移されたもので、古老の話では「オコリ」落しの効能があるという。創始は天明・寛政の頃という、

祭礼は 6月25日

## 荒 檜 神 社

当社は西檜尾区28号字東上出5番地にあつて、祭神は天照大神、ウハツツツノカミ表筒男神、ナカツツツノカミ中筒男神、ソコツツツノカミ底筒男神、仲哀天皇、神功皇后である。

社の創立は不詳であるが、男大迹皇子潜竜の頃崇敬された神々ということが口碑に伝えられている。

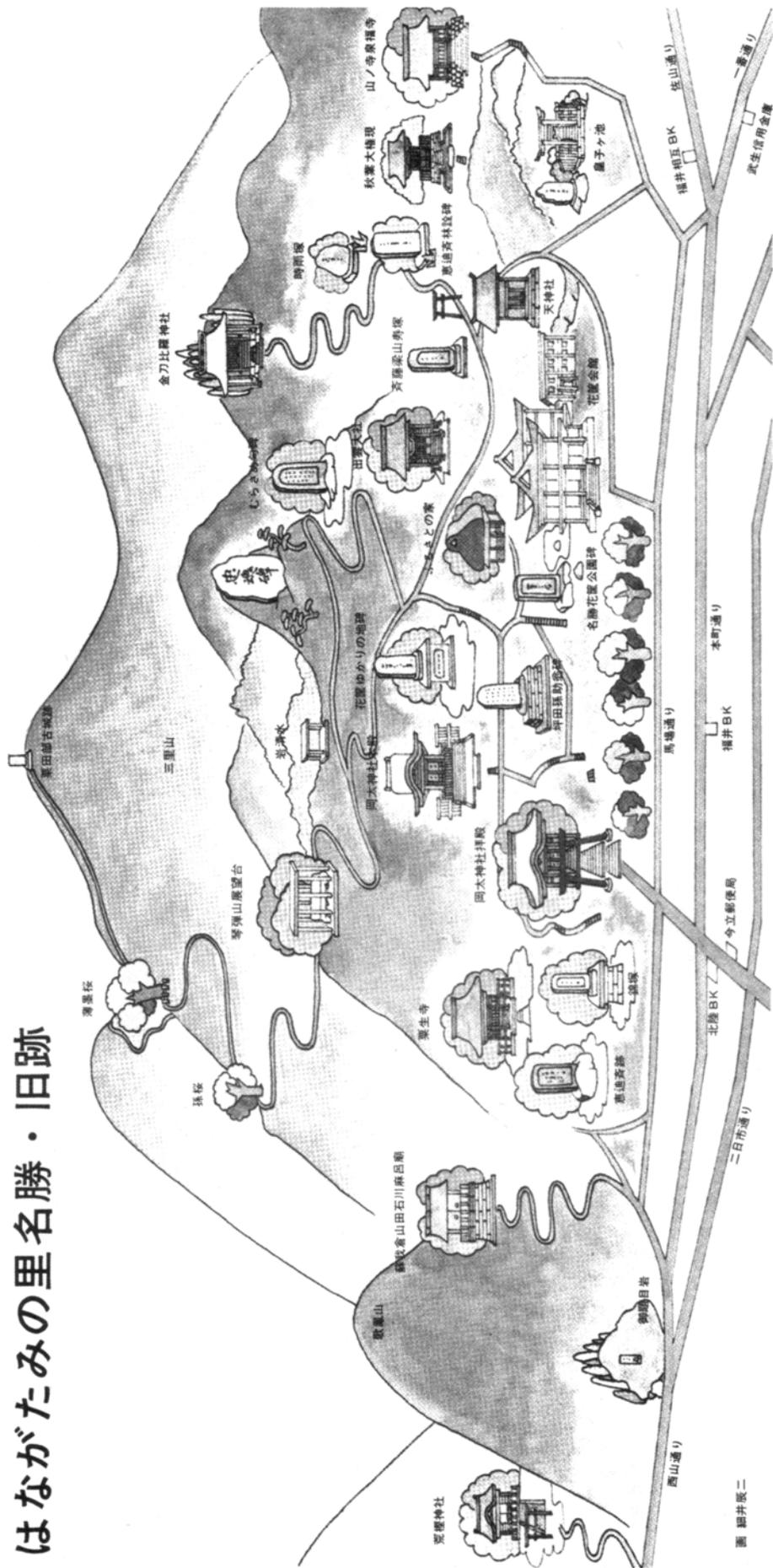
またこの社には、平安期と鎌倉期各一軀の十一面観音の等身大の金銅仏像が祀られている。

## 麻 気 神 社

荒檜神社境内に当社があるが、麻和加介命を祭神とし、相殿に振媛を祀る。男大迹皇子が幼少の頃、母振媛命に従つて此処檜尾の地に来て、伯父麻和加介の家に在御したと言われている。

そのためこの二柱を祀っている。

# はながたみの里名勝・旧跡



おわりに

今回の編集作業を始めるにあたり、原本「あわたべ抄史および継体天皇雑感」の文字入力は、障害者の授産施設に委託しました。原本の解読できない漢字や変換不可能な漢字に手間取ったようです。

その後の部員たちの手で文章を直したり、写真を加えたり、旧字の漢字を新字体に置き換えたりなどの編集作業を行い、その結果親しみのあるガイドブックでありながら、歴史を正確に伝えるが出来たと思っています。

今後、より良いガイドブックをめざし再改訂版の発行を考えていますので、ご一読いただいて感想や疑問に思う点がありましたら、お手数ですが人づくり・ふるさと文化部の部員もしくは部長佐々木までご連絡をいただければ幸いです。

人づくり・ふるさと文化部 部員一同

#### 参考とした文献

郷土史往来、男大迹部志、福井県史、今立郡誌、今立町誌、粟田部警防史、若越 73号、南越、正弥正廣氏下書き原稿、観光連盟岡山氏記事、その他フリー百科辞典「ウィキペディア」、諸団体ホームページなど

## 男大迹部の里 来歴

**初 版**      発 行 年：昭和 59 年 9 月  
誌 名：あわたべ抄史 男大迹部の里  
編 者：正弥正廣 発行人：林 栄  
発 行 所：粟田部壮年グループ連絡協議会 文化部

**改定版(1)** 発 行 年：平成 19 年 9 月  
誌 名：粟田部史跡ガイドブック 男大迹部の里  
編集発行：花筐自治振興会 人づくり・ふるさと文化部  
(構成:佐々木 昇、考証:宮田 尚一、写真:竹内 賢一)

改定版(1)

発行年：平成19年 9月

誌名：栗田部史跡ガイドブック 男大迹部の里

編集発行：花筐自治振興会

人づくり・ふるさと文化部